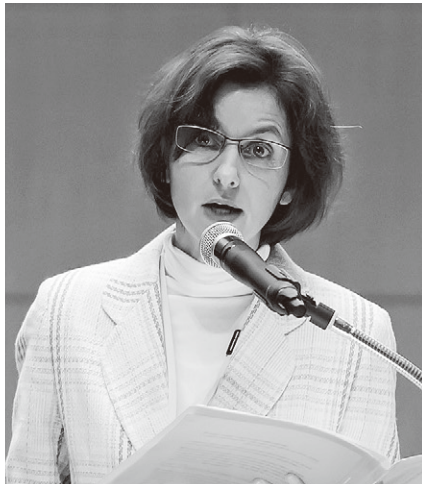
特別講演Ⅰ　日本仏画を記述する・比較する・展示する ―ルーヴル美術館極東美術コレクション初代学芸員ガストン・ミジョン（1864-1930）の視線―

上智大学准教授　ロール・シュワルツ＝アレナレス



上智大学文学部フランス文学科准教授。専門は日本美術史とミュゼオロジーで、比較、横断的、国際的視点から研究している。ルーヴル美術学校修了、ソルボンヌ（パリ第4）大学にて平安仏画についての論文で博士号取得（「応徳涅槃図」試論―星辰信仰をめぐる二重のイメージ、2003年）。ルーヴル美術学校、国立ギメ東洋美術館、東北大学東洋・日本美術史研究室、京都国立博物館、お茶の水大学比較日本教育センターを経て現職。2007年鹿島美術財団賞受賞。

本講演では、ガストン・ミジョンがその美を発見した平安仏画の傑作、東寺旧蔵十二天像の記述を紹介する。国や時代を超えて平安仏画の「マテリアル」な側面に注目したミジョンの視線を介し、宗教画において装飾技法がもつ意味について、西洋美術と比較しながら考えたい。

哲学者で美術史家のディディ・ユベルマンは、西洋絵画における「神秘的な身体」の表象について、フラ・アンジェリコの「影の聖母」（サン・マルコ修道院）を例に挙げ、高貴な素材による「視覚的」「触覚的」な工芸表現を通して、「聖」と「美」の現前が志向されたと分析している。素材や絵画技法によって宗教的意味を表す態度は、日本の平安仏画にも共通するところがある。東洋美術史家の有賀祥隆の言葉を借りれば、仏教美術の本質は、自然に手を加えてより美しく飾り、功徳を得るという考え方にあるのだ。

一八九三年よりルーヴル美術館工芸部門の極東美術コレクション初代責任者を務め、日本美術展示室創設に尽力したガストン・ミジョン（1864-1930）は、平安仏画の絢爛豪華な装飾表現、とくにその工芸性に着目し、いち早く評価したフランス人である。その知られざる先駆的な功績は、仏画の鑑賞について現代の我々にも多くを教えてくれる。

一九〇六年秋に来日し、名所、美術館、寺社を訪れたミジョンは、一九〇八年に『日本にて ― 美術の聖域へのプロムナード』を出版し、フランスで大きな評判を呼んだ。ルーヴルの学芸員という身分、高級家具職人の家系という出自、浮世絵への熱烈な関心、コレクターとの強いつながりを兼ね備えたミジョンは、当時のジャポニズム愛好家とは一線を画した存在である。それゆえ、深い洞察力をもって平安仏画を鑑賞し、作品の様式的特徴を捉え、さらに受容や解釈の歴史にまで踏み込んだ記述を行うことができた。ギメ美術館所蔵の重要な仏画の多くは、ミジョンが日本に派遣された際に入手したものである。

ミジョンは来日の際、一一二七年の火災による焼失に伴い新写された、東寺旧蔵十二天像（現、京都国立博物館蔵）を鑑賞した。この十二天像は、一度目の写しが鳥羽院から「疎荒」と叱責され、新たに制作し直したものと言われ、截金文様、裏彩色、具色など、当時の装飾技巧が凝縮された平安仏画の傑作である。ミジョンは十二の掛幅を弘法大師の作と紹介したうえで、「きわめて装飾的であると同時に思考の作品である」と、工芸美と宗教表現の融合を絶賛した。とくにもっとも優美な水天像については、「光り輝く瑞々しい肉体をもち、月のように不可思議で透明な白色をしており（…）頭髪は青色でおおわれているが、その色はアジサイのようにあまりに青白いため、水天はより穏やかな、より甘美なものとして目に映る」と書いている。

未知の芸術を前に、率直な感嘆をあらわにしたミジョンの記述からは、同時代人のフェノロサほど、宗教的儀式や制作背景、専門用語に詳しくなかったことが窺い知れる。しかし彼は、装飾美術の伝統を継ぐ者という自負から、作品の素材、色彩、モチーフの選択に着目し、平安仏画における「荘厳」の表現、「工芸性」の意味、色彩の洗練といった基本的特徴を見抜いた。たとえば、「暈繝彩色」という彩色法によって生まれる色彩のグラデーションと調和を評価し、「これほど非物質的な絵画はない」と表現している。また、「截金」、「具色」といった平安美術独特の工芸技法についても、中世ヨーロッパの細密画やタペストリーと結びつけて理解していた。極東美術と西洋美術の比較によって、新たな発見を得ようとするミジョンの態度は、一八九三年に日本美術コレクションがルーヴル美術館に入ったとき、フランス王室の宝物コレクションに隣接して展示させたことにも表れている。

近代化を迎えた日本美術の未来を憂い、西洋の美術品との比較によってその意味や美を普及させようとしたミジョンの功績は、美術の比較研究が盛んに試みられている今日、異文化間の出会いや融合のあるべき姿を伝えてくれる。その眼差しをたどることによって、今後も日本仏教美術という芸術遺産に、改めて光を当てることができるだろう。